

鮮やかな夏の初体験⑧

～初のラブホテル編 大人だけが入れるエッチな空間～

※この作品に登場する人物は、すべて 18 歳以上の成人です。実在の未成年・学校・団体とは関係ありません。

「映画面白かったねえ～」

里桜が興奮気味に言う。

目が少し潤んでいて、まだスクリーンの余韻が残っているようだった。

「うん。今日のは当たりだったね。序盤はイマイチだったけど、それを過ぎたら一気に面白くなった」

俺もストローを噛みながら答える。

フードコートテーブルには、すでに飲み干した炭酸のカップが二つ。映画を観終わった後のこの時間が、俺たちにとっては一番落ち着く時間だった。

ショッピングモールと映画館が一体化したこの場所は、地元ではかなり有名なデートスポットだ。夏休みの昼下がりということもあり、周囲からは若者たちの声が絶え間なく聞こえてくる。

隣のテーブルではカップルが一台のスマホを覗き込み、少し離れたところでは数人の若者が盛り上がっている。

そんな喧騒の中で、俺たちは二人だけの空間を保っていた。

ひとしきり映画の感想を言い合った後、ふと沈黙が落ちる。

「これからどうする？」

俺がそう聞くと、里桜は「ん～……」と小さく声を漏らし、顎に手を当てた。

考える仕草が、どこか子供っぽくて可愛い。

「下着売り場行く？」

「えっ!？」

俺が思わず声を上げると、彼女はくすっと笑った。

「ふふっ、冗談」

「……ふう」

俺は胸を撫で下ろす。

あの空間は何度行っても慣れない。明るい照明の下に並ぶレースやシースルーの下着を、彼女が無邪気に手に取る姿を想像しただけで、背筋が少し熱くなる。

今日は映画を観る約束のデートで、この後の予定は特に決めていなかった。

里桜が「どうしても観たい映画がある!」と言うから、電車に乗って遥々やってきた場所だ。

ここから先のプランを考えるのは、男である俺の役目——のはずなのだが、正直、デートプランを組み立てるのは苦手だった。

いつも里桜が軽やかに引っ張ってくれるのが、俺たちの恒例になっている。

彼女の次の言葉を待っていると、突然、その目が輝いた。

「あっ! 私、行きたい場所があった」

こうして次々と行きたいところを思いつくのが、彼女の凄いところであり、俺にとって助かる部分でもある。

「ラブホ、行きたい!」

……いや、困る部分だった。

「ちょ、公の場でそんなこと言わないでよ!」

俺が慌てて声を潜めると、里桜は少しだけ申し訳なさそうに笑った。

「うん、ごめんね。けど、私たちって、お互いの部屋でしかしたことないじゃん。だから、一度行ってみたいんだよね」

「ん〜……」

ここでさらに、大人の階段を上ってしまっているのか。

俺の頭の中で、理性と欲望がぐるぐると回る。

「ダメ？」

里桜が上目遣いで見てくる。

長い睫毛の下からこちらを覗き込む瞳は甘く、それでいて少しだけ挑発的だった。

こんなの、拒否できるわけがない。

「もちろん、割り勘するから」

「割り勘は申し訳ないよ」

「お互い、まだ細々としたバイト民なんだし、それは当然だよ！」

こういうところはしっかりしているんだよなあ、と俺は苦笑する。

里桜は普段から「対等でありたい」と言い張るタイプだった。

「本番しなくてもさ、とりあえず見に行こうよ！ 新しい発見があるかもよ？」

「そこまで言うなら……」

「よし、決定！」

彼女がにこやかに言い切る。

本来、こういうときに喜ぶのは男の方だと思うのだが、なぜか今は彼女の方が少し上気していた。

◇ ◇ ◇

到着したのは、映画館から最寄りのラブホテルだった。

値段も手頃で、「初めてのラブホだから」と言って選んだ場所なのだが――

「なにこれ！　すごい豪華！」

里桜がドアを開けた瞬間、声を弾ませる。

値段の割に部屋は広々としていて、ベッドも異様に大きい。白いシーツがぴんと張られ、柔らかな間接照明が室内を照らしていた。

まあ、エッチをするための場所なのだから、当然なのかもしれないけれど。

里桜はさっそく、楽しそうに部屋の探索を始めた。

「孝史！　お風呂、すごく大きいよ！　うちの倍ぐらいあるんじゃないかな！」

俺も釣られて浴室を覗き込む。

確かに豪華だった。浴槽は大人の男女が二人でゆったり入れるほど大きく、シャワーヘッドも二つある。壁の一面には、大きな鏡まで取り付けられていた。

「テレビもでっか！」

次から次へと目移りする彼女は、初めて高級ホテルに来た子供のような。

そんな無邪気さが、かえって俺の胸をざわつかせる。

里桜が何気なくリモコンのスイッチを押すと――

『あっ！　あっ！　イク！　いっちゃう〜！』

女性の大きな喘ぎ声が、大画面から突然流れ出した。

里桜は目を見開き、慌ててリモコンのボタンを連打する。

画面が消えた。

「い、今のは無いよね〜」

彼女が引きつった笑みを浮かべる。

……気まずすぎる。

ラブホテルに入って早々これかよ、と俺は内心で呻いた。

「あ、大きい鏡があるよ！」

里桜が無理やり話題を変えるように、壁一面の鏡を指差した。

「これ、何をするための鏡なんだろう？ 身だしなみを整えるには大きすぎるよね？」

「……な、何だろうね？」

その鏡の用途をなんとなく察している俺は、何も言えなかった。

ベッドの前に立てば、二人の姿が全身まで映る。

何に使うものなのかは、想像に難くない。

里桜はテーブルの上に置かれたメニューを見つけ、ぱらぱらとページをめくり始めた。

「へえ、甘い物もあるじゃん！ それに、ぼったくりみたいな値段じゃない！こんなに立派な部屋なのに安い〜！」

すると、彼女はぱっと顔を上げた。

「ねえ、孝史。ハニトー頼んでいい？」

さっきまでフードコートにいたのに……。

「昼ご飯、食べたばかりじゃない？」

「甘い物は別腹なの！ それに、こんな豪華なホテルでハニトーをこの値段で食べられるなんて、滅多にないよ！ ねえ、一緒に食べようよ……」

上目遣い、再び。

ここは彼女の欲望をさっさと満たすべきだな、と俺は悟った。

「うん、いいよ」

「よっしゃ！」

ラブホテルで少し浮かれすぎではなかろうか。

俺は小さくため息をついた。

◇ ◇ ◇

「ハニトー！」

部屋に届いたそれは、想像以上に大きかった。

厚切りのトーストに、たっぷりのアイスと蜂蜜。バナナや生クリームまで山のように盛られ、今にも皿からはみ出しそうになっている。

ハニトーというものをよく知らない俺は、あまりにも豪勢なデザートに少し引いた。

「孝史、一緒に食べよう！」

「う、うん……」

さすがに一人では食べきれないだろうと思い、俺もソファに腰を下ろす。

里桜が器用にナイフとフォークを使い、パンを切り分けていく。甘い香りが、部屋の中にほのかに広がった。

すると、彼女は何を思ったのか、再びテレビのリモコンへ手を伸ばした。

画面に映し出されたのは、もちろん大人向けの映像だった。

「里桜！？」

「いや、私って、孝史が普段どんなのを観てるのか、ちらっとしか知らないからさ。ちょっと興味があって……」

「けど、これを観ながらデザートって……」

食欲と性欲は分けない。

俺は心の中で叫んだ。

「いいじゃん。ほら、孝史も食べて」

何かを思いついたのか、彼女は切り分けたパンをフォークに刺し、俺の前に差し出した。

「はい、孝史。あーん」

「ちょ、里桜……」

「いいじゃん。フードコートじゃ、孝史は恥ずかしがってできないでしょ？ 二人きりの空間なんだから、存分に甘えたまえ」

彼女が少し得意げに胸を張る。

その仕草が、妙に色っぽかった。

「仕方ないなあ……」

俺は彼女が差し出した一切れを頬張った。

ねっとりとした蜂蜜の甘さと、冷たいアイスが口の中で溶けていく。

「どう？ 美味しい？」

「うん、美味しい」

「おお！ じゃあ、私も頂こう」

彼女も大きな一口を口に入れる。

頬張った頬が少しだけ膨らみ、幸せそうに目を細めた。

「うん、美味しい。結構やるじゃん、ラブホ！」

里桜は満足そうに笑った。

◇ ◇ ◇

テレビでは相変わらず、男女が激しく絡み合う映像が流れ続けている。

喘ぎ声と水音が、部屋の空気へじわりと染み込んでいた。

里桜は、どうして平気なのだろうか。

俺なんて、好きな女の子がすぐ隣にいる状態でこんな映像を観ることに、強烈な違和感を覚えている。視線をどこに置けばいいのか分からない。

なのに彼女は、まるでドキュメンタリーでも観るような真面目な顔で画面を見つめている。

俺はただ、一緒に頼んだドリンクを彼女に合わせて口へ運ぶだけだった。

そんな奇妙な時間が、しばらく続いた。

そのとき――

「孝史～」

甘えた声とともに、柔らかな感触が体に密着してきた。

里桜がソファの上で、肩をぴったりとくっつけてくる。彼女の体温が、薄い服越しにじわりと伝わった。

「り、里桜！？」

画面には、今も裸で絡み合う男女が映っている。

その映像と、すぐ隣にいる彼女の柔らかな体が重なり、俺の頭は完全に混乱してしまった。

「チューしよ」

「里桜、酔ってない？」

アルコールなんて飲んでいない。俺たちはまだ、お酒を飲める年齢ではない。

それでも彼女の頬は、ほんのりと赤く染まっていた。

大人向けの映像に影響されたのか。それとも、ハニトーの甘さに酔っているのか。

「そんな野暮なこと言わないで！」

彼女は俺の顔を両手で挟み、自分の方へ強引に向かせた。

そして、迷いなく唇を重ねてくる。

口の中に、甘い味が広がった。

蜂蜜と、彼女の柔らかな吐息。

舌がそっと触れてきて、俺も反射的に応じてしまう。

彼女はさらに体を預け、俺をソファへ押し倒した。長い髪が顔にかかり、甘いシャンプーの香りが鼻をくすぐる。

「孝史、エッチしたい……」

やっぱり、こういう展開になるよね……。

さっきから、大人向けの映像を流しっぱなしにしていたのだ。部屋の空気は、とっくに甘く淫らなものへと変わっている。

「いいよ。けど、そんなに焦らないの」

俺は体を起こし、すでに「女の顔」になっている里桜の頭を優しく撫でた。

指を髪に通すと、彼女は気持ち良さそうに目を細める。

「せっかくラブホテルに来たんだし、ちゃんと段階を踏んでしようよ」

「段階？」

彼女にはピンと来ないらしい。首を傾げ、潤んだ瞳でこちらを見上げてくる。

「まずはお風呂。せっかく大きな浴槽があるんだから、一緒に入らない？」

「うん！」

彼女の声が、少しだけ上擦った。

「それに、歯も磨かないとね。甘い物を食べた後だし」

彼女は慌てて目を見開く。

「えっ！？ 私の口、臭かった？」

「ううん、今は大丈夫。だけど、もう少しエチケットは大切にしようね、っていう話」

「うん……分かった……」

せっかく盛り上がった雰囲気が、少しだけ冷めてしまった気がする。

だが、ラブホテルへ来たのだから、勢いだけで済ませるのはもったいない。

ちゃんと、丁寧に彼女を感じたい。

「じゃあ、お風呂に入ろうか」

俺たちは浴室へ向かった。

「湯船、使うでしょ？ お湯を入れておくね」

浴槽のボタンを押すと、熱いお湯が勢いよく注がれ始めた。

湯気がゆっくりと立ち上り、大きな鏡が白く霞んでいく。

「ん？」

振り返ると、里桜が直立したまま動かなくなっていた。

「どうしたの？」

「私たちって、一緒にお風呂に入るの、初めてじゃない？」

「うん、そうだね」

今になって自覚したのだろうか。

彼女の耳が、ほんのりと赤く染まっていた。

「そう思うと、なんか恥ずかしくなってきた……」

俺は思わず、くすくすと笑ってしまった。

さっきまでの勢いはどこへやら。急に初々しい反応を見せる彼女が、たまらなく愛おしい。

「それなら——脱がし合っこする？」

「えっ……？」

「里桜が、俺の服を脱がせてよ。俺も里桜の服を脱がせるから」

「……うん」

彼女は恥ずかしそうに俯きながら、俺のシャツのボタンへ震える指先を伸ばした。

——体験版はここまでです——

この続きは製品版でお楽しみください。

初めて二人で入る大きなお風呂。
お互いの裸を意識しながら、体を洗い合う恋人たち。

さらに、大きな鏡が置かれたラブホテルならではの体験も——。

普段とは違う「大人だけの空間」で、孝史と里桜は心も体もさらに深く重ねていく。